2010 年度ジェンダーフォーラム公開講演会

［2010 年 7 月 9 日（金）、立教大学池袋キャンパス 7 号館 7101 教室、18：30 － 20：30］

「構築されたメディアとメディアによる構築――ジェンダー表象をめぐって」

講師：諸橋 泰樹氏

（フェリス女学院大学文学部教授）

●司会・新田啓子：2010 年度立教大学ジェンダーフォーラム公開講演会を始めさせていただきます。私は、この立教大学ジェンダーフォーラムの所長を務めております新田と申します。よろしくお願いいたします。

今日は大変に荒れ模様に変わってしまったお天気の中お越しいただき、ありがとうございました。この立教大学のジェンダーフォーラム公開講演会は、例年 6 月 23 日から始まる男女共同参画週間の前後に年 1 回行うフォーラムのメイン行事でありますが、今年度は、フェリス女学院大学教授でいらっしゃる諸橋泰樹先生をお招きいたしました。

諸橋先生は、紹介文にもありますとおり、1970 年代以降、女性学というひとつの学問分野が日本で確立され、学科やプログラムなどとして増えていく中、メディア学やコミュニケーション学の中からその 1 つの形をおつくりになった、初期の――初期フェミニストというとちょっと平塚らいてうとかが意味されるので語弊があるかもしれませんが――そのような時期からご活躍なさってきた草分け的な研究者のお 1 人として広く知られております。

この女性学という分野には、まずもって社会運動であったフェミニズムというものを、どのように学問に生かしていくかという視点があったわけですが、諸橋先生の場合は、ご自身の社会における活動が学問・教育に還元される中で、いかなる実を結ぶかということをお示しになってきた研究者として、大変な影響力を与えてこられたと思います。そのため先生は、日本女性学会などのジェンダー関連学会や日本出版学会、日本ペンクラブ、地方自治体の男女共同参画審議会役員などのご重職を歴任なさっております。

本日は、おそらく公開講演会では初の試みだと思いますが、双方向的に行います。聴衆の皆様には、ワークシートを使い、ジェンダーのディスコースがメディアやひとつの番組を構築していく過程を考えて頂きます。

なお、今回の諸橋先生の講演会は、異文化コミュニケーション研究科、キャリアセンター、コミュニティ福祉学部、社会学部、人権・ハラスメント対策センター、チャプレン室、文学部の協賛をいただき実現しましたことを申し添えさせていただきます。

それでは、よろしくお願いいたします。

●諸橋泰樹氏：どうも皆さん、こんにちは。

足場の悪い中、よくいらっしゃいました。まだまだ梅雨が明けそうにないですね。また今回は、立教大学のジェンダーフォーラムにお呼びいただきまして、ありがとうございます。首都圏の大学には、東

京女子大学やＩＣＵ等に女性学やジェンダー関連の研究所がありますが、セントポールのジェンダー研究所はその中の古株の１つかと思います。

今、新田所長がお話しされたように、これまでのような一方通行的なレクチャー形式ではなく、皆さん方に素材を見てもらい、それを分析していただくという軽いワークをしながら進められればと思います。大まかな目論見としては小１時間お話をして、残り小１時間で、ある番組を観ながらワークをします。お手持ちの分析シートに書き込んだ結果については、こちらから色いろとお伺いするつもりです。本当は小グループに分かれて、ワイワイやってもらって、我が班はこういうふうに見たとか、こんなふうな意見が出ましたとか、そういう報告をしてもらうとおもしろいんですけれども、残念ながらここは固定椅子になっていますので、班に分けて話し合ってもらう形態は取れません。１人ひとりシートに記入してもらった後に、「どう見ました？どう思います？」などとぼくの方からインタビューに伺う、そんなふうにしてこのフォーラムをつくり上げられればと思っております。

ぼくは、専門である社会学の分野とマスコミニュケーション研究の分野から、ジェンダー問題に入りました。と言っても、正規の社会学研究科とかマスコミニュケーション、社会情報研究の大学や大学院、たとえば東京大学の新聞研究所とかを出たわけではないので、そういう意味で社会学やマスコミ学を正統的に学んできたわけでは必ずしもありません。当初考えていたのは政治社会学などの方面から社会や人間関係のポリティカルな側面について研究したいという漠とした思いでした。やっているうちにマスコミとか社会学、それからジェンダーが何となく専門の筋になってきたのです。

このような方向に向かった動機は、恐らく、ここにいらっしゃる皆さん方と同じで、人はなぜ性別を理由に差別をするんだろうとか、そもそも性別って一体どういうものなのかなとかといったような疑問です。もって生まれた所与のものなのか、親の影響か、文化の規範か、教育のたまものか、メディアが描く性別はどう影響するのか。ほかにもたとえば、今や民主党は今度の参議院議員選挙で 50 議席を割るかもしれないとメディアで言われているけれども、やる前からどうしてそんなことがわかるのかとか、そのように報道したら、そのことによっていよいよ 50 議席を割るのではないだろうか、などの色いろ素朴な疑問があるわけですね。人はどのように政治的社会化していくのかということに興味があったものですから、ずっと人の社会化と社会意識、世論、イデオロギーなどについて考えてきました。

社会化ってわかりますね、ソーシャライゼーションです。人間がただの生物学的なヒトから社会的な人間になるということですね。ヒトは生まれた時は頭の中は真っ白で、何もインストールされていない状態で発生し、およそ３年から 20 年かけて「人間」になっていきます。

勤務先の学生は 20 歳前後ですけれども、まだ人並みではありません。まだカタカナのヒトの段階です。まず社会的お約束の朝９時に学校に来られない。それから日本語がまだ満足にできない。朝からアイスクリームを食べてお腹痛いとか言って社会的慣習が身についていない。20 年間インストールをしてきてもまだまともな人間じゃないわけで、仕方がないので ATOK をインストールしてやり、Excel をインストールしてやって、何とか社会的な存在としての「人間」にしていかなきゃいけないわけです。

社会化のエージェンシーとしての地域・家族・学校・メディア

政治的社会化の過程で影響を及ぼすもの、つまり社会化のエージェンシーとして、どのような社会環境があるでしょうか。まず１つ目は地域だと思われます。人は必ずどこかの地域に産み込まれます。地

域空間における様ざまな他者が、その地域の規範を身につけさせます。今でこそ地域の力はなくなりましたけれども、地域の人間関係が子育ての力になり、地域における人間がその地域の子どもたちにとっての大事なモデルとなってきた。２つ目が家庭教育でしょう。母語をインストールしてやったり、親の価値観に沿っていろいろと子どもが政治的社会化される。もっとも、近代家族はごく最近になってできたものです。３つ目が、これも近代にできてきた学校ですね。学校が寄ってたかって、女はこうあるべし、男はこうあるべしとか、「国語」とか「国民」とか、そういう概念をインストールしていく。そして、４つ目がメディアです。メディアは、生まれながらにして、もう我われの子守唄代わりとして機能してきました。

どうもこれは社会集団の発達過程、発展段階みたいな感じもありますね。人類はそもそも地域から始まった。やがて家族をつくった。やがて近代になって学校に行くようになった。それから産業革命以降、メディアが社会化の重要なエージェンシーになったということで言うと、我われの生活世界といいますか、社会的影響の世界の広がりを意味しているかもしれません。これから先は「電脳空間」「ネット空間」のようなものになるのでしょうか。

いずれにしても、産まれた時はアンインストール状態の我われに、周囲の外界が色いろなことを教え込んで、社会的な生きものである「人間」にしていくわけです。これをソーシャライゼーション、社会化と言うわけです。

さて、その中で特にジェンダーは、社会化のプロセスを教えてくれる大変おもしろい例の１つと言ってもいいかもしれません。

まず地域が寄ってたかって、その地域を支える女らしさ、男らしさを身につけさせていく。しかもこの「らしさ」の規範は土地によって違うし時代によって変わります。地域によって支配的な条件がさまざまある中で、ある地域にコミュニティーができると、そこにおける１人前の人間として、子どもが社会化されていくわけです。先程言いましたように、今は地域はほとんど崩壊してしまいましたが、かつては地域が力を持っていて、子どもを１人前にするためのイニシエーションとか、そういうことをしてきたわけですね。たとえば７歳になったら村はずれの滝壺に飛び込まなきゃいけないなどという試練を男の子に課す風習のところがあったりしますね。そうすると、７歳になって滝壺に飛び込むことで、「よくやった。お前は男だ」となるわけです。ところがまれに飛び込めない男の子がいる。そうすると「お前は男になる試練から外れた。よって、女になりなさい」と女にならなきゃいけない地域とかがあるそうです。

２番目の社会化のエージェンシーは家族であると言いました。特に近代家族においては、子どもというものは愛し合っている女と男がつくったものであり、そういう愛情家族の中で、両親が子どもにいろいろ教えていくのが美しい形態である、ということになっている。しかし、それまで地域の中の子どもというのは、どの父親の子かわからなかったり、５歳くらいになれば１人前の労働力として働いていましたから、まあみんなのものだったわけです。それが、特に近代以降、子どもたちは、かわいいとか、母親が育てるべしとかという「母性」というイデオロギーがつくり出された。母子関係が強調されたりする中で「私の子ども」という概念が生まれ、子どもは家族に閉じ込められるようになって、家族の所有物になっていくわけですね。

その中で子どもたちは、親という権力に言われるがまま、親の好みの色に染まっていかざるを得なくなる。ジェンダーなども、親のしつけや賞罰といった，子どもに対する政治学によって形づくられるというところがあるわけですね。

学校における隠れたカリキュラムとジェンダー

次に学校ですが、これこそまさにルイ・アルチュセールが喝破したように、近代国家のイデオロギー装置として機能してきたわけです。年端もいかない子どもたちを４～５歳ぐらいから一斉に閉じ込める。そして同じ時間の中で同じカリキュラムを消化して、１年後には上に上がりなさいという、およそ個人の発達課題を無視したようなやり方で人間を集団で育てる。これは合理的な人間の工場ですね。近代において「人間」の製造工場が始まったわけです。

ミシェル･フーコーはじめ社会史の思想家が、近代にできた装置として、１つは学校、もう１つが監獄、もう１つが軍隊であるということを指摘しました。さらにもう１つ、精神病院を加えてもいいでしょう。これらはどれも似ていますね。まずみんな一斉に同じ服を着せる。行進をさせる。体操が大好き。そして、みんなに同じものを食べさせる。塀で囲まれている。そうやって人格を陶冶（とうや）し、みな同じような人間にしてゆく。そういう場所です。犯罪者は監獄へ、地域のトリックスターは精神病院へ、そうでないいい若い者は国家のために戦う軍隊へ、子どもたちは学校へと、それぞれの工場へ動員されたわけです。

つまり、子どもたちとか、それから狂気のようなものは、みんな近代の中から排除されていくわけですね。そうやって閉じ込められていく。これらは近代国家に都合のよい人格がつくられていく場所として機能していくわけですけれども、学校は、そういう中でジェンダーをもつくる工場として機能してきました。

学校というところは先ほども言ったように集団で人格を陶冶（とうや）するところです。近代における国民国家を担ったり工場の機械を動かしたりするために必要な最低限の知識を教えること、一方では、余り突出しない平均的な考え方を植えつけるのに非常に効果がありました。しかし実際には、どこまで知識を教えることに成功したかについては、なかなか難しいところがあります。

学校は知識を教えるところというよりも、実は隠れたカリキュラム、教育社会学の用語でヒドゥン・カリキュラムといいますけれども、そういう潜在的機能のあるところです。通常、微分だ積分だ、四文字熟語だ英単語だという構造化され階梯化されたカリキュラムがあって、ある程度勉強したら試験を受けて、それをクリアしたらもう１つ上に上がりなさいという形で階段を上っていくわけですが、皆さん方の中でどれほどの方が微分積分を覚えておられるやら、「捲土重来」という字が書けるやら。おもての顕在的なカリキュラムはほとんど成功していないというところがある。

しかし、一方では、学校の中には先ほど言ったように制服があり、給食があり、軍隊的な一斉行進があり、班ごとに競うことがあり、そういう仕方で私たちの身体と精神にいろいろなものを植えつける力はありました。たとえば、微分積分は忘れていても、ラジオ体操第１が鳴ると体が勝手に動きますよね。ラジオ体操は、「国民的」な統合のための身体的表象装置です。国家が身体内化されてしまったわけで、まさに隠れたカリキュラムは、我われの骨の髄にまでしみ込んでいる。

ジェンダーがらみで言うと、隠れたカリキュラムというのは、たとえば出席名簿が男の子の名前が先で、女の子の名前が後に記載され、呼ばれるような、おもて立ったカリキュラムからは見えてこない、潜在的な学校文化などをさします。こういった名簿には、女性男性の序列がすべりこんでいますよね。当たり前と思っていたことが、これは諸外国ではアルファベット順で女男が混合だったりしてて、目からうろこが落ちます。そうか、別に女と男で名簿を別べつにする必要はないんだと改めて気づかされます。あるいは、入場行進などもそうで、卒業式とか入学式では、今でも男の子の列が先で女の子の列が

後というところがあるそうです。

子どもたちは、細かい勉強に関しては忘れてしまいますけれども、女の子は赤のランドセル、男の子は黒のランドセルというようなジェンダー文化を、鮮明な記憶とともに憶えています。勤務先の女子大における女性学の授業で隠れたカリキュラムの話をしてレポートを書かせると、恨みつらみとともに色いろな例がたくさん上がってきます。たとえば、小学校に上がるときに、おじいちゃんが高いランドセルを買ってくれた。赤のランドセルだった。本当は、私は黒が好きなので、マジックインキで全部真っ黒に塗ったらえらく怒られたという小レポートを書いてきた学生がいました。女の子の好みがみんなが赤とは限りません。

こんな学生もいました。その学生の小学校では運動会の最終プログラムは、５年・６年合同で、しかも女男込みで校庭何周かの長距離走をする。それが代々 100 年ぐらい続く伝統なんだそうで、優勝した生徒は最後のセレモニーで校旗を校長先生に返すという栄えある役を担うそうです。そして小レポートを書いた学生は、５年生の時に、一番運動会で盛り上がるその長距離走で、何と優勝したというんです。さて、伝統に従って彼女は最後の閉会の時に校長先生に校旗を返すと思いきや、その役は２位の６年生の男の子がしたそうです。ひどいことをしますね。こういう学校文化がまさに隠れたカリキュラムです。ＰＴＡのおとなたち、生徒たち、本人に、「ああ、やっぱり女子では重厚な閉会式ではカッコつかないんだ、そういうものなんだ」「１位になっても女子は壇に上がれないんだ」と教えてしまったのです。

また、こんな教育社会学の調査の話があります。高校の女男共学のクラスで、男の先生が男子の生徒を指したけれども、その生徒が答えられない。先生は「どうした、お前はこんな問題もできなくて」と怒る。次に「お前は本来頭がいいはずじゃないか」とちょっとおだてもする。「こんなんじゃいい大学いけないぞ」ともう一度、谷底に突き落とす。その上で「今日は居残りなさい」とか「問題集をやってきなさい」と、どーんと宿題を出すんです。ところが同じ観察調査で、同じ男の先生がクラスで女子の生徒を指しました。その生徒ができないと、「まっ、いっか、座れ」。これでおしまいだそうです。これもまさに、隠れたカリキュラムです。男の子は、叱られ、頭がいいはずだとかおだてられ、宿題を沢山出されて伸びるに決まっているわけですね。ところが、女の子に対してはこれといった働きかけがないままおしまいです。ちゃっかりした子はラッキーと思うでしょうけれども、大抵の女の子は「失礼しちゃうわ」と思うと思います。

結果、どうも学力差もこういうところでつくられているんじゃないかということが言われ出しています。女子の学力と男子の学力を、本質主義的な脳の違いの問題に還元してしまって、だから女子と男子とでは能力が異なるのだという言説は少なくありません。私たちはさも、科学的にそうなのかなあ、と思ってしまっているところがあります。しかし実は、女の子に対する期待、男の子に対する期待が社会的にあらかじめ違っていて、そしてそれに応じて先生たちが働きかけをしたりしなかったりすれば、これはピグマリオン効果よろしく伸びたり伸びなかったりするのは当然じゃないかというわけです。

体力差も社会的につくられる

今の事例は、学力差は社会的につくられるのではないかという説の例ですけれども、さらには、体力差も社会的につくっているんじゃないかというおもしろい事例があります。先ほどの女脳、男脳だけでなく、女の筋肉、男の筋肉といった体力差に、我われは非常に科学的な根拠があると思っていますけれども、どうも体力差も地域や家族や学校がつくっている節があるというわけです。

これはスポーツとジェンダーの調査研究の話ですけれども、高校生の体力テストでソフトボール投げの女男の記録差というのは大きいんです。女子のソフトボール投げはあまり飛ばないけれど、男子はそれなりに飛ぶんですね。で、それ見たことか、女と男ではもともと筋力のつくられ方が違うからだということで、一種の本質主義的な議論が出てくるわけです。

ところが、女子の生徒たちはこう言うわけです。「私たちは生まれてこのかた、キャッチボール一つしたことない」と。考えてみればそうですね。子どもにとって、物をつかんで投げるというのは、大事な発達課題の一つです。けれどもカリカチュアして言えば、女の子が物をつかんで放り投げると「この子はおてんばね」と言われてしまう。それで、「キャッチボールなんてやらないでお人形さんで遊びなさい」と言われてしまいます。ところが男の子が幼児期に物をつかんで投げると、「こいつは将来、星飛雄馬になるんじゃないか」と、大リーグボール養成ギブスを着けたくなる親の欲目がある。

そういう、ジェンダーと遊びがおとなの中で結びついてしまっている中、たまたま家では娘しか生まれなかったお父さんが、その女の子が５歳ぐらいになったころに、娘とちょっとキャッチボールのひとつでもしたいなとグローブとボールを買ってきキャッチボールをし始めると、お母さんが飛んでくるわけです。「娘とのキャッチボールなんかやめてください。顔に当たったらどうするんですか」と、禁止される。地域でもそうです。地域で男の子たちと一緒に女の子が草野球のメンバーに入れてもらうこともあるでしょう。けれども、男の子は近所のお兄さんから「消える魔球」の投げ方を習ったりして、地域の中でしょっちゅう野球をやっていたわけです。女の子はたまにおみそ扱いで、メンバーが足りないから入れてもらう程度だった。しかも、これもカリカチュアして言えば、女の子は地域でキャッチボールとか草野球とかをやっていても、夕方には呼び戻されるわけです。夕方だし危ないから帰っていらっしゃいというわけですね。実際は、「危ないから」ではなくて、夕ご飯の手伝いをしなさいということです。一方男の子はどうかというと、「ご飯ですよ」と言われるまで野球に興じていればよかったんですよね。それぐらい経験に違いがあるわけです。

そこで、今ほど言った高校生の女子たちからのクレームです。「お父さんとキャッチボール一つしたことない、近所で草野球ひとつしたことない。それを 17 歳になって年１回だけ投げろと言われて、記録が出るわけないじゃないか」というわけです。一計を案じた先生は、それならみんな利き腕以外で投げてみよう、という体力テストをしました。女男ともに、右利きの子は左手で、左利きの子は右手で投げさせたんですね。そうしたら女男ともほとんど記録は変わりませんでした。何のことはない、男子も左で投げればひょうろく玉なんです。

つまり、男子は小さいころからお父さんとキャッチボールをしたり地域で草野球をしたりでスキルや筋力が身についている。だから遠投できるんです。女子はそういうことをしたこともないという環境の中、さあ１年に１回投げてみろというのは、これは科学的なテストとは言えませんね。まさにそういうものを科学者は測ってきて、違う違うと騒ぎ立てていた。

学校は、学力差、さらには体力差までつくっているんじゃないだろうかというわけです。

社会的構築主義とカテゴリー化

こういった、人間は社会を構築し、構築した社会によってまた人間が構築されるということを、私たち社会科学者の世界では、社会的構築主義という言い方をします。我われは、生物学的には生まれたときはただのカタカナで書く「ヒト」でした。そういう意味では世界共通の生き物です。だけれども、社

会や文化、経済、時代精神、地域性、教育、親の育て方などのポリティカルな力によって、我われのパーソナリティーとか、知識とか、習慣とか、イデオロギーとか、さらには体力や身体などまで形成され、その社会・文化に存在を拘束された「人」になるわけです。

ところで、構築された「人」は、何かしらの属性で呼ばれます。たとえば「日本人」とか「大阪人」といったように所属する国や地域名でカテゴリー化されたり、「女性」とか「男性」といったように性でひとくくりに分類されるわけです。社会や人間は、命名されること、つまり分類されてそこにことばが与えられて初めて立ち現れるという意味においても、社会的構築主義の考え方があてはまると言えます。

今ここにコップがありますけれども、「コップ」という単語を知らないと、私たちはこれを認識できません。眼には見える。眼には見えるけれども、ことばがないと、何じゃこれはなのです。ある種の精神疾患や失語症を患った人には、「コップ」という単語が出てこないためにこれがコップであるということがわかりません。眼に見えるしさわることもできるのだけれど、「何でしょうね、これ」といって頭にかぶったり耳に当てたりします。人間は、言語がないと、認知はできても認識はできないのです。私たちは、すべからくことばを使ってしかものごとを認識できないのです。

たとえば、雨上がりの空に虹が出ますね。虹の色の数は７色と思っていますけれども、７色について全部言えますか。これが結構出てこないんですね。赤、橙、黄、緑、青、そして次がなかなか出てこなくて、最後は紫。紫の前の色はなかなか出てきません。ここに入るのは「藍」なんですね。藍色です。かつて日本人は「藍色」が見えました。しかしながら今や我われは、藍色は見えませんね。眼が悪くなったのか。そうじゃないです。藍色ということばを使わなくなったんです。死語になったからです。そこの藍色の服の人なんて、もう言わないですよね。そこのブルーの服の人、でよくなっちゃったんです。頭では虹は７色と覚えていますが、実際には６色しか言えないのです。現代では藍色は青のカテゴリーに吸収されてしまいました。

米国に行くと虹は６色です。「藍」を言いません。米国人は藍が見えないのか、藍に当たることばがないのかというと、そんなことはなくて、藍色に対応するのはインディゴです。しかし、向こうではインディゴを虹の色に入れず、６色だそうです。ドイツの虹の色の数などはさぞ細かいだろうと思いますが、全然違って、虹の色は５色だそうです。「橙」と「藍」を言わないようです。紛争地帯として知られるリベリアは、バサ語という言語をしゃべっているそうですけれども、虹の色の数は２色とのことです。黄色系と緑系で済んじゃう。

これはどれが合っているのか間違っているのかの問題ではありません。本物の虹の色の数は、言うまでもなく無限です。どこからどこまでが赤という範囲があるわけではありません。赤から橙まで無限のグラデーションがあり、境界に線が引いてあるわけでもなく、画然と別れているわけではないのです。ですが、我われは言語を用いて、そこに境界線を引いて認識するしかなかったのです。ですから、２色でも７色でも、文化や習慣による言語的カテゴリーの問題であって五十歩百歩、相対的なものでしかありません。虹に言わせれば、「２だろうが７だろうが余計なお世話だ。私は無限だ、分類しきれない」と言うでしょうね。実は、人も世界も分けきれないのです。

カテゴリー化と言語による命名の暴力性

人類は、世界・自然と切れてしまったために、孤独や根源的不安を生きることになり、世界を対象化する必要性に迫られました。対象化する行為が言語化です。最初にやったのが「分ける」ことでした。

似たもの同士をひとくくりにして、分類し、そこに名前をつけたわけです。初めにロゴス、つまりことばという理性ありき。ことばがあると、世界が立ち現れ、対象化できるようになります。人は混沌に対して、分けて、名づけることによって、世界とつながり、孤独を解消し、その不安感を払拭してきました。「分かる」は「分ける」からきているというのはご存じの通りで、「分けて」「分かる」と何だか安心しますね。

そのため、大昔から人類は、「分類」して「命名」することをせっせとやってきました。カテゴリー化して名づけるという、知的作業、フィクショナルな作業は、結局ソシュールが唱えた言語による示差性をつくることに他なりません。青と赤は、ことばが違うから違うわけです。これは、「女」と「男」というカテゴリー、名づけでも全く同じです。

私たちは、カテゴリー化の暴力を色いろなところでこうむっています。人種という名のカテゴリー、身近なところでは血液型という名のカテゴリー、星座という名のカテゴリー。いろいろ楽しんだりもするけれども、不愉快な目にも遭いますね。たとえば、あなたＢ型でしょうとか言われるとなぜかムッとする。そうやって決めつけられたくない、ラベリングされたくないわけです。

実際19世紀から20世紀はカテゴリー化の時代でした。国で分け、民族で分け、人種で分け、知能で分け、言語で分け、色いろなことをやってきて、人間を分類してきました。それらに科学、とくに自然科学は、真理・客観的なものであるという神話と権威を振りまいて、お墨付きを与えてきました。だから、人種ごとに知能テストをしたりして、先ほどお話したソフトボール投げのテストをしていたように、暮らしている文化や知識体系の前提が違うのに、結果を見て「やっぱり違う」「遅れている」とかやっていた。そういうことをやって「違い」を発見してきた、つくり出してきたのが現代でした。その最たるものがナチズムでしょう。科学的とされる優生思想を掲げて、アーリア民族の本質主義的優位性を説き、ユダヤ人というカテゴリーに対しては根絶やしにすらしかねませんでした。

そうやって私たちは、人をカテゴリー化し、そのカテゴリーを主要なものだと思わせる暴力的な命名の仕方をして、人を枠に入れ、そうでない人を排除してきたわけです。でも、さすがにそうではないということがわかってきた。

そもそも、人や世界は分けきれません。分ければ分けるほど、新しいことばが必要になります。次に、名づけの行為は、置き換えただけですから、「分かった」ことにはなりません。せいぜいが言い換えただけで「分かった気になる」だけです。そして、「分けられた」側にとっては、たったひと言で要約されて暴力になる、ということです。

人間はいかなる意味でも７でもなければ２でもない。要約され得ません。けれどもそれをひと言で「メガネ」と言われたり「ヒゲ」と言われたり、「チビ」と言われたり「デブ」と言われたり、「女」と言われたり、そうやって一言でくくることの暴力、くくられることの暴力から、私たちはそろそろおいとましないといけません。多文化主義化する社会の中では、国籍どころか人種とかエスニシティーとか言語とか、あるいはジェンダーとかそういうカテゴリーが一筋縄ではいかない、もっと多様で、ハイブリッドなもので、例外もたくさんあるということがわかってきています。

小泉純一郎もと首相は解散・総選挙にあたって「郵政民営化賛成か反対か」、ジョージ・ブッシュもと大統領は９・11にあたって「文明か野蛮か」とディコトミー、２分法で世界をとらえました。頭のいいやり方ではなく、暴力的分類ですね。「女か男か」というディコトミーも、あまりに単純すぎます。実は性の別も虹のようにグラデーションで、どこからが女性でどこからが男性かはなかなかわからないのです。

たとえば、性の別は、生物学的セックス、社会・文化的ジェンダー、性自認としてのセクシュアル・アイデンティティ、そして性指向性とも言われるセクシュアル・オリエンテーションの４つのフェーズがあるとされます。これだけでも性の違いは単純なものではありません。しかも、セックスには内性器、外性器、染色体など様ざまなレベルがあってそのどれもがグラデーションをなしてます。ジェンダーは、男性がスカートを穿いたり、女性があぐらをかいたり、性別役割のありようが時代によって変化したり、社会的・文化的に様ざまなバリエーションがあります。セクシュアル・アイデンティティは、身体は男性でも自分の思いは女性という人、またその逆の人など、これもまた色いろなバリエーションがあって、それぞれに濃淡があります。セクシュアル・オリエンテーションは、性的興味が同性に向くか、異性に向くか、どちらにも向くか、どちらにも向かないか、またモノなどに向くか、多様な指向性があります。これらの４つのフェースの様ざまなバリエーションやグラデーションの中で、身体は女性で心は男性、自分のことを男性と思っていて、性的対象は女性に向く、なんてケースがあり得るわけです。こうなると、性を２つだけに決めつけることはナンセンスになりますね。

もちろん、ことばってすごいんですよ。何にもないところ、あるいは混沌としていたところに、事物を在らしめるのですから。たとえば、「セクシュアルハラスメント」や「ドメスティックバイオレンス」という命名は、これまでないものとされていたことに、言語的秩序を与えて、認識対象とし、可視化させたわけです。

しかしながら、一方ではその言語がひとたび確立されると、そうでないものはどんどん排除されていくというわけですね。また、グレーゾーンの問題が常につきまとう。世界は分けきれないのです。天体望遠鏡が精緻になって、宇宙の外にまた宇宙が見つかり、また見つかって、そのたびに名づけてゆくしかないように。

そのような意味で、性の違いというのは生物学的・科学的な本質ではなく、言語による命名によって構築された概念です。先の性の４つのフェーズとそれぞれのバリエーションやグラデーションも、言語によって分類したものに過ぎません。今後も変わってゆくでしょう。そして私たちは、それを否応なく言語実践しているというわけです。私たちはそのことばを使って、自らパフォーマンスをしている。人のこともそういう眼差しで見ている。

社会的構築主義の対立概念にあるのが先ほど言った本質主義というものです。人間にあらかじめその人を決定するなにものかが備わっていると考え、「Ｂ型ってこういうタイプよねえ」とか「〇〇人ってこうだから」とかいう言い方で人を決めつけるやり方ですね。その最たるものが性の別に対する決めつけかもしれません。そういう仕方で人を所与の存在としてカテゴライズして、あとは問答無用としてしまうやり方です。これは、小泉＝ブッシュ型の思考停止の議論であり、先ほど、本質主義はナチズムにまでつながりかねないぞということは、申し上げたとおりです。

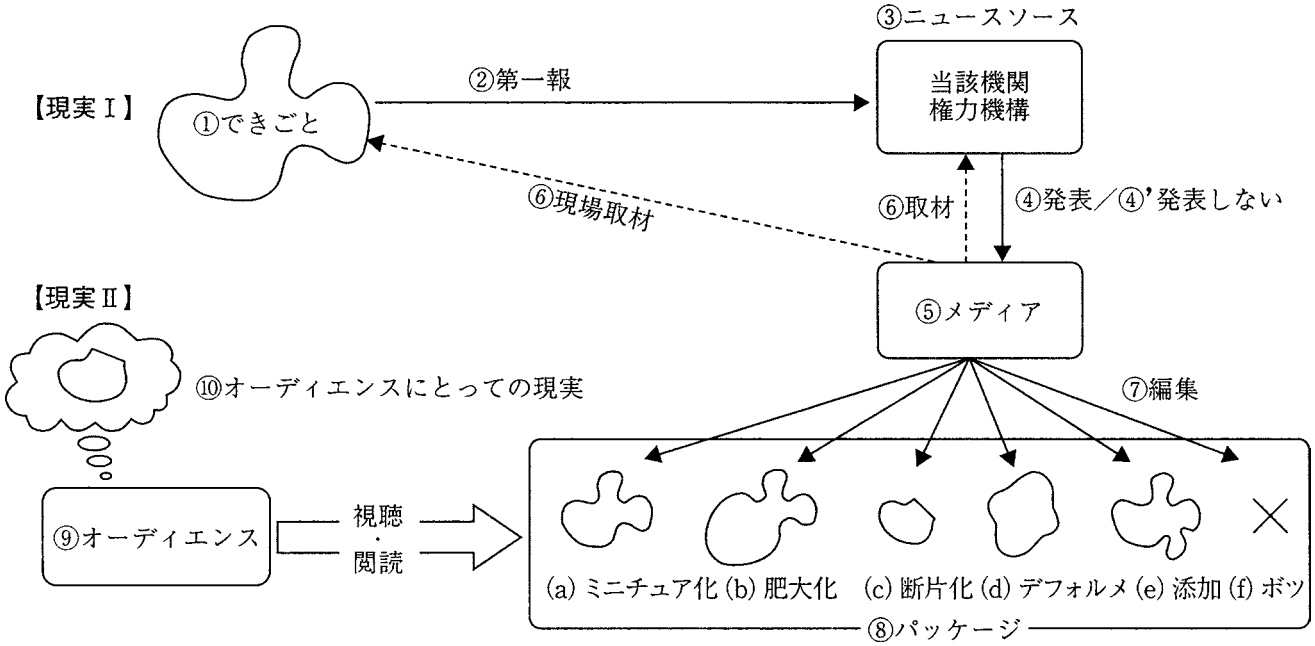
多様なファクターによって構築されるメディア

さて、性の別は、まさに社会的につくられるという話をしましたけれども、今日のお話のもう１つの眼目は、実はメディアも社会的につくられるということを、皆さん方に知っていっていただきたいということです。やっとメディアの本題に入りますが、メディアは、ジェンダーと同じように社会的、文化的な文脈の中でつくられていきます。つまり構成されます。これまで構築ということばを使いましたけれども、構成と言ってもいいでしょう。

社会化のエージェンシーとして、先ほど地域、家族、学校、そして４つ目にメディアを挙げましたね。地域が崩壊し、家庭が崩壊し、学校が崩壊しという中で、メディアだけはまあ、まだ何となく気を吐いています。そのメディアは、私たちが生まれてから死ぬまで、私たちの周囲の情報環境として、あるいは洗脳装置として働いているわけです。しかもケータイ社会ですから、そこかしこにビッグブラザーのブラウン管があるようなもので、私たちはそれらを見たり監視したり、同時に監視されたりもしながら、メディア社会を今生きている。

そのメディアというものも、社会的につくられたもの、文化的な文脈の中でつくられたものに他ならないわけです。そこで、こんな図にして説明しましょう（図１）。

図１　マスメディア情報の構成プロセス



左上のアメーバみたいのが本物のできごとです。「現実Ⅰ」としましょう。できごとというのは、当然のことながら複雑怪奇ですね。火事が起きたとします。火事の原因はいろいろあります。家に火が点いてから燃え落ちるまで時間的な経過もあります。このできごとをメディアが報道します。メディアが報道するときにこのできごとはいきなりメディアに届くでしょうか。

たとえば、我が家が火事になった時に、皆さんはＮＨＫに電話しますか。すぐ取材に来てください。燃えごろです。スクープですよ。しませんね。『朝日』の支局に電話しますか。すぐ来てください。我が家の燃えぶりを取材してくださいって。やりませんね。最初にできごとの第一報が行くのは、当該の機関です。そこには当該の情報が集まるところでもありますので、権力機構と言ってもいいでしょう。お役所とか 119 番とか 110 番です。あるいは当該機関ですね。海外で事故が起きれば外務省や航空会社や旅行社に連絡が行くわけです。そこにまず情報が集中します。これを「ニュースソース」と言っておきましょう。

メディアができごとの現場に居合わせることはまずありません。世の中には無数のできごと、たとえば火事が起きているわけですが、そこにたまたまテレビ局、新聞社の社員がいて映像や写真を撮ったり記事にできたとしたら、その人が１番怪しい。

それから、当該機関が情報をつかまないこともあります。我が家が燃えても、ちょっとしたボヤだったら消防署に電話しませんね。隣の家に可愛い仔猫が生まれてもテレビ局にファックスを入れませんね。当該機関に連絡が行かないできごとが、世の中には無数に存在するわけです。

できごとをつかんだこの権力機構は、メディアに発表を行います。今、こんなことが起きていますと発表するんですね。メディアはここで、警察の動きが何か慌ただしいとか、記者会見が設定されるとかして、できごとを知るわけです。たとえば警察発表では、「今、これこれこういう事件が起きて、容疑者が逃げています」というふうに、被害者、容疑者のことを説明し、写真までつけてくれます。それで、メディアは発表ものをそのまま報道してもいいですけれども、それではあまりに芸がないので、夜討ち朝駆けで刑事さんに聞いたり、現場に取材に行ったりするわけです。

実は、忘れがちなことですけれども、ニュースソースである権力機構が発表しないというのもあります。特に権力犯罪の場合、握りつぶされる。沖縄が米国から返還されるとき、日本がお金を肩代わりしたり、核兵器配備の密約が米国との間にあったことは、政権を揺るがしかねなかったのでずっと黙っていました。発表がないと、その事象は起きていないことになります。

ところで、当たり前ですけれども、メディアが撮ってきた映像、見聞きしてきた情報をそのまま100％報道することはできません。わかりやすくするため、短くするため、耳目を惹くため、喜怒哀楽を喚起するため、売れるため、いろいろな方法で構成すなわち編集します。たとえば（ａ）のようにできごとを200分の１スケールとかでミニチュアにする。これなど、こういったモデル図としてはあり得ますけど、実際には文章であれ映像であれ不可能ですよね。また、（ｂ）のように、目立つところをさらに肥大化するというやり方も考えられます。大体は（ｃ）みたいに、200分の１スケールにしておいて、目立つところだけちょん切って報道する。一種の断片化ですね。この目立つところだけ残せばいいだろうというわけです。

さもなければ、（ｄ）のように、難しいできごとだし多くの人はよくわからないだろうから話を丸くしちゃおう、ということもあるでしょう。枝葉を取っちゃうんですね。あるいは、なんかちょっとさびしいな、もうちょっと面白くしようと、（ｅ）のように原型をとどめない全然違うものになってしまうこともあります。まあ、やらせのようなもの、過度な演出といってもいいでしょう。

そしてもう１つ。（ｆ）のように、発表もあった、取材もした、だけれども紙面に載らなかった、放送で流されなかった、ということもしばしばあります。たとえば急に入ってきた大事件に押されて時間枠不足、紙面不足となり、用意していたトピックが飛んだ、記事が差し替えられたりします。高校野球が延長になったので３カ月かけて取材してきた特集が落とされ、ついぞ日の目を見なかった。また、時間との戦いですので、締切に間に合わなかったなんてこともしばしばあります。

他にも、メディアがスポンサー筋におもんぱかって、記事や番組がお蔵入りにするケースもあります。広告やＣＭを出して時間枠や紙誌面のスペースを買ってくれるスポンサーは、民間放送や新聞社・出版社にとって収入のための大事な顧客です。広告やＣＭを出してくれている広告主の不祥事は扱いづらいことは想像に難くありません。さらに政治家の圧力でやめちゃうというケースもあります。たとえばＮＨＫが関連制作会社とつくった戦時中の日本軍の戦時性奴隷、いわゆる従軍慰安婦の人たちの国際法廷に関する番組は、政治家の圧力でボツになりかけ、放送はされたものの中身が全然違うものになってしまって、裁判にまでなったのはご存じのとおりです。

また、これは一概に悪い事例ということではありませんが、記者クラブでの報道協定というのがあって、誘拐事件などはすぐに報道しないよう縛りがある場合があります。警察発表はあるけれども、誘拐

事件が発生していることを報道してしまうと「警察には知らせていない」のはウソとばれますし、犯人が被害者に危害を加えたり逃走してしまいかねませんので、容疑者が逮捕されるまで各社が一斉に報道を伏せるやりかたです。最近減ったような印象がありますけれど、かつては夕刊や午後のニュースでいきなり「〇〇ちゃん無事保護」などと報道される例が結構ありました。「何、こんな事件あったっけ？」とよくよく記事を読んでみると、実は１カ月前に起きていた誘拐だったりする。１カ月間そうやって警察と各社とで協定を結び、公表を伏せていたわけです。このように、報じられないできごとも無数にあるのです。

構築されたメディアによって現実が構築される

いずれにしても、メディアが報道するここの部分で、できごとはまるっきり変わってしまう。まさにこれらの部分は構築された、つまり構成された部分です。編集と言ってもいいでしょう。そうやってつくられるわけですね。

私たちは、最終的に紙誌面記事として、完パケの番組やコーナーとして、⑧のパッケージを見たり聞いたり読んだりしているわけです。たとえば断片化された（ｃ）が最終的に紙面に載ったり放映されたりしたもので、私たちはこれを見たり読んだりしたとしましょう。そうすると私たちの認識は、「おお、こういうできごとだったのね」となる。なぜならば、現場も知りませんし、ニュースソースやメディアがどのようなファクターによって最終的な記事や番組にしていったか、そこはブラックボックスで全然知りませんし、最終的にできあがった「製品」でしか知りようがない、できあがったパッケージこそが私たちにとっての全てなのですから。したがって、私たちのこのできごとに対する認識は（ｃ）と同じものにならざるを得ない。そして、私たちオーディエンスにとってはこれこそが事実なのです。これを「現実Ⅱ」としましょう。

でも、これ、全然違いますね。「現実Ⅰ」と、構築されたメディアを通じて私たちが認識している「現実Ⅱ」とは、ずれがあるわけです。

メディアが製品をプロダクツするプロセスには、文字や写真や映像や音響といった「現実」を再現するため表現技法の制約、取材者やカメラなどのスタンス、デスクの思惑、時間的な制約、紙面の制約、スポンサーの圧力、政治家の圧力、視聴率や販売部数、内部的な出世抗争や思惑など、いろいろな要因があり、本物の現実が物理的にそのまま再現されるはずがないのです。できごとをインクのしみの文字にしなきゃいけないし、できごとを１枚の写真で表さなきゃいけないし、できごとをたった15秒とかの音声や映像で表わさなきゃいけないわけですから。

皆さん方の中で、取材を受けたことがある方がいらっしゃるかと思いますが、スタジオまで行って取材を受けると半日つぶれますね。喫茶店などで新聞記者の取材を受けても２～３時間つぶれます。でも、テレビで放映されるのはたった15秒とか、新聞に載るのはたった２行とかです。あんなに話したのにどこいっちゃったんだという感じです。また、似ても似つかない話になることもある。メディアというものはそういう意味で、もともと筋が決まっているか、さもなければエキセントリックなところだけ取り上げるか、あるいは時間の都合など、色いろな条件の中で針の穴を通すようにして最終的にみんなの眼にふれるわけです。私たちはその報道されたものがすべてだと思って、現実を認識しています。

『あるある大辞典』という番組がありましたね。納豆では痩せないという現実があるわけですが、納豆で痩せるという、そういう番組が構成されました。すると私たちは、「うん、痩せるんだ」と思い込

んで、納豆を買いに走りましたね。まさにメディアが言うことが本物になるわけです。メディアが予言を自己成就してしまうというわけですね。構成されたメディアの言うことが私たちの現実を構成する。

どうでしょう。ジェンダーとよく似ていませんか。性の別も、先程言ったように生身の女の人や男の人、あるいはどちらかはっきりわからないような人など、実に多様で複雑です。それが女とか男とかに単純化されて分類されて、そして私たちはそれを見て「うん、女はやっぱ女だな、男は男だな」というトートロジーに陥って、そうやって現実を構築しています。メディアも私たちのまなざしと同じように現実を切り取って命名しているだけにすぎない。「この人が容疑者です」とか「被害者です」とか、「納豆は痩せます」とか命名しているにすぎなくて、ジェンダーと同じ言語的なラベリングの作業をしているわけです。ですので、メディアのこういう構築作業や機能と私たちがやっているジェンダーの構築作業や機能とは非常に親和性が高いということになります。

テレビ番組の構築のされ方をチェックしてみる

さて、ここまでおわかりいただいた上で、これから、メディアによって私たちの現実がどういうふうにつくられているのかを、実際に番組を観てもらいながら、皆さん方と少し分析をしていきたいと思います。

細木数子さんという六占星術の権威とされる女性の占い師が出てくる番組の録画ビデオを観ていただきます。2005 年 5 月 24 日、火曜日に放送されたＴＢＳテレビの人生相談風トーク番組『ズバリ言うわよ！』という番組です。事前に、こういう時代背景だったということと、こういう番組構成だということだけ、少しお話をしておきましょう。

細木数子さんがメインのこの番組、『ズバリ言うわよ！』中に「ズバリ女 100 人幸せ白書」という 10 分ほどのコーナーがあります。この日のテーマは性教育で、そのときの新聞のテレビ欄はこのようなものでした。「ズバリ言うわよ！細木魂の叫び…日本の性教育は絶対反対命をかけてつぶす」という何やら長い勇ましいタイトルであります。

時代は 2005 年、今から５年前ですけれども、格差社会が広がる時代でした。小泉・竹中構造改革の中でネオリベラリズム、すなわち弱肉強食の新自由主義が浸透し、「勝ち組で何が悪い。負け組になるのは自己責任だ」ということで、３万人もの自殺者が出る、そういう時代です。この小泉構造改革は、弱者を切り捨て、高齢者を切り捨て、中国はじめアジアとの関係を悪化させ、９・11 後の米国の戦争に追随して自衛隊を海外派兵し、そしてジェンダーバッシングをしていきます。たとえば選択制の夫婦別姓の導入に対しては家族の一体感を破壊しひいては国家の一体化を壊すものだとか、「ジェンダーフリー教育」は女男一緒に着替えをさせているとか、小泉旋風で勢いづいた政権与党やその関連組織が悪意に満ちたプロパガンダを繰り広げました。その一環として、性教育に対しても批判が相次ぎ、さらには「ジェンダー」ということばの使用に対する圧力、「男女の特性を認める正しい男女共同参画」なる面妖な主張なども出てきて、政治的な力を得た時代でもあります。そういう社会心理の時代にこの番組がつくられたということを基礎的な知識としていただいた上で番組を観ていただきたいと思います。

さて、番組構成についての事前説明ですけれども、この番組は先に言ったようにコーナーものの 10 分ほどのもので、大きく３つのパートに分かれています。ですので、そのパートも頭に入れた上で観てください（表１）。

第１パートは、１分 10 秒ほどの問題提起の部分です。ここのところは、ちょっとドキュメンタリー

表１　コーナー「ズバリ女 100 人幸せ白書」の３部構成（約 11 分 20 秒）

第１パート （約1分10秒）	・問題提起	センセーショナルなドキュメンタリー的構成
第２パート （約5分30秒）	・会場の「女性 100 人」への質問と回答 ・登場タレントとメインゲスト（中尾）との討論 ・司会の発言 ・会場の女性２名の意見	トークおよびバラエティー番組風構成
第３パート （約4分30秒）	・細木数子の“託宣”	ワンマン（ワンパーソン）ショー

注：開始前に、司会による「振り」が約 10 秒ほどある

ふうになっています。カットが多く、色いろな映像資料が挿入されています。ここでは特に、映っている映像資料の意味、そしてＢＧＭなどの音響、その効果、またテロップ、その効果などについて、考えながら見聞きしていただけますか。

第２パートは、１番長い部分で５分 30 秒ほどです。会場にいる女性 100 人が YES、NO のボタンを押して、会場の女性たちやゲストが賛成派、反対派に分かれて発言し討論するところになっています。細木数子さんはまだここでは登場しませんが、彼女の映像は一部で結構出てきます。この映り方を見てもらうといいと思います。

第３パートは、細木数子さんの独壇場になります。これが４分 30 秒ほどです。真打ち登場で細木さんのご託宣がおりるというわけです。この番組を見たことのある方もいらっしゃると思いますが、「あなた、地獄に落ちるわよ」とか言って、歯に衣着せずにゲストをやっつけたりとかするわけです。

細木さんはご存じのとおり保守的なイデオロギーの持ち主で、女性に対して結婚すべきとか苗字を変えるべきとか、子どもをつくりなさいとかいうことを主張するタイプの人です。彼女のワンパーソンショー、ひとり舞台が繰り広げられて最後のご託宣が下される場所です。ここでは、ＳＥつまり効果音やＢＧＭ、その効果、またテロップなどに着目されると面白いでしょう。

以上を頭に入れて、まず番組を１回流しますので観てみてください。終わったら、今度は分析シートの記入の仕方を解説した上で、もう１回、今度は分析シートに記入しながら観ていただくことにします。

じゃあ、番組ビデオの再生をお願いしましょう。

―ビデオ再生―

はい、ありがとうございました。どうでしょう、普通に観ていると、「ふんふんふん」で済んでしまうところが、改めて事前解説つきで観ると、突っ込みどころ満載という感じはないでしょうか。

では、次に、分析的に観てもらうために、チェックシートを使いたいと思います。お手元に番組分析シートがありますね（表２）。次のような項目が挙げてあります。これを、３つのパート別に、記入しながら観てください。

表２「番組分析シート」に書かれていたチェック項目

技法と意味		チェック項目
映像技法	①	どのような映像が映っているか、どのようなアングル･切り取り方･色づかい･配置・長さか
演出	②	どのようなテロップが映っているか、どのようなフォント・色遣い・大きさか
	③	どのようなアナウンスがかぶっているか、性別・口調・トーン・ことば遣いか
	④	どのような音（効果音）がかぶっているか
	⑤	どのような音楽（BGM）がかぶっているか、調・リズム・アレンジか
登場人物	⑥	誰が出ているか、性別・位置・アングル・服装・表情・姿勢やしぐさか
	⑦	その人はどんな発言をしているか、内容・しゃべり方・トーンか
	⑧	その人はどんな役割・立場で出演しているか
シチュエーション、オーディエンスの意図	⑨	これらはどのような場で撮られているか、屋内外・スタジオ・照明・バックなどの背景・調度類
	⑩	映らなかったもの（カットされた映像や発言）はどのようなものと推測されるか
	⑪	どのような思惑からこのような番組が制作されたのだろうか
オーディエンスにとっての意味	(1)	このように構成された番組は、どのような「意味」を有しているだろうか
	(2)	こうやって構成された番組を見聞きして人びとは、どのように思うだろうか（視聴経験＝効果）
クリティック	(3)	細木の主張の曖昧さ、問題点は
	(4)	「ズバリ」言ってくれることを求める心理、強さやリーダーを求める社会心理的背景、細木のキャラクター等の要因

全部の項目を記入するのは大変ですので、できる範囲で結構ですが、第１パートでは以下の項目を書き入れていただくといいと思います。

映像技法としては、何が映っているか、どのようなアングルか、切り取り方、色使い、配置、長さといったことがあります。それからどのようなテロップが映っているか。どのようなアナウンスがかぶっているか。バックのしゃべりですね。またその声はどんな口調だろうか。それから、どんな効果音がかぶっているか。ＳＥですね。それからどのような音楽がかぶっているか。ＢＧＭの調子とかリズムとかアレンジですね。そして登場人物。誰が出ているか。どんな発言をしているか。これらはなるべく入れてもらいましょう。

それから「シチュエーション、オーディエンスの意図」の⑪の「思惑」の部分はちょっと書き入れてもらいましょうかね。第１パートはどうしてこういう映像ばかり集めたんでしょう。どうしてこういう音楽をかぶせたんでしょう。ちょっと考えてみてください。

そして、「オーディエンスにとっての意味」の中の (1)、(2) では、第１パートを見たり聞いたりした視聴者は、どういうふうに思うかを推察してみてください。そこに何らかの意味が構成されるはずです。人びとにとってこういう意味が構築されたのではないか、それはこういう音楽、こういう映像、こういうアナウンスがかぶっていたからではないか。そういったことを類推しながら、視聴者はこれをどのように観ただろうかということを考えてください。

第２パートは討論の部分です。討論の部分も何が映っているか、どのようなアングルか、ここらへんをちょっと書いてください。会場の人間が大映しになったりクレーンで鳥瞰されたりしています。あと、会場の人たちの発言とか会場の様子、どよめきとか表情とか。それから、会場の様子に合わせて細木数子さんが所どころ画面端に映り込みますが、どんな顔しているだろうかとか、なんでここで細木さんの顔を入れたのかなとか、そこら辺もちょっと推察しながら書き出してみるとおもしろいでしょう。

最後の第３パートは細木数子さんしか出てきません。どのようなテロップが映っているか、どんな音楽がかぶっているか、また細木数子以外に会場のどんな人たちが映っているかとかというあたりを色いろと記入していっていただきます。特に、先にちょっと注意を喚起したように、ＢＧＭは重要な意味を持っているようです。また、細木数子のしゃべりの中身の質をチェックすると同時に、細木数子の顔のアップ、細木数子の座っていた椅子、彼女の服装や色、そして会場の女性たちのしぐさやファッションなど、いろんな演出が施されていますので、それらがどのような効果をもたらしているかも記入できるでしょう。

そして最終的に、オーディエンスにとっての意味がどのように構築されたのか。この 10 分ほどのコーナーを観て、人びとはどう思うだろうか。どのような視聴経験をするのだろうか、それは人びとにとってどういう意味を持つだろうか、といったあたりを考えて、できれば記入していっていただければと思います。こういったクリティークの部分は、後でまたマイクを持って皆さん方にうかがって行きたいと思いますので、すぐに記入しなくても結構です。

それでは、再び番組の頭から観ていただきましょう。

―ビデオ再生―

さあいかがでしょうか。２回観ると、こういう映り方しているなとか、こういう演出だなというのが、ある程度おわかりいただいてきたかと思います。では、皆さんにうかがいましょうかね。第１パート、第２パート、第３パートの順に分析結果やご意見を聞きながら、最終的に視聴者がどういうところに連れて行かれようとしているか、これから会場の方がたと考えてみたいと思います。

センセーショナルに構成された導入部

●諸橋泰樹氏: まず、出だし、どうでしょうね。第１パートの音楽を聞いて、どんな感じを受けましたか。
●参加者：激しい音楽で、何か嫌な感じっていうか、何か怖い感じというか、そんな感じ。
●諸橋泰樹氏：何か、不安げな出だしでしたね。

何か映っていたもので特徴的だったのは何かありますか？
●参加者：女性の政治家の質問とそれに対する小泉首相の答弁でしょうか。
●諸橋泰樹氏：国会答弁ね。あの小泉首相の、人ごとのようなしゃべり方っていう感じですかね。そうですね、何かふてぶてしいあの言い方で、「もっと考えてもらいたいと思います」というあれですね。
ほかに、第１パートで映っていたもので何か特徴的なのはありますか。
●参加者:やっぱり新聞の見出しとか、あるいは性教育用の女性男性の人形そのものを映すとかですね。
●諸橋泰樹氏：なるほど。新聞の見出しと教材用の性器がわかる人形。新聞の見出しはぱっと見えただけでしょうけれども、どんなことが書いてありましたか。
●参加者：性教育に反対するような。
●諸橋泰樹氏：「反対するような」だった。何て書いてあったんでしょう。あの見出しのカットシーンは、一瞬しか映りませんから実際には読めないですね。けれどもこれが不思議なことに、「何か反対するような」というニュアンスは伝わります。つまり、読めなくていいんですね。とにかくどーんと映って、トンデモナイことが学校の性教育で行われていてそれを新聞が弾劾しているっていうのがわかればいいってことなんでしょう。
１番最初に映ったのは学校のシーンでした。その時、ジャーンという効果音が入って、そのあと電子音によるロック調のリズムと暗いメロディーで始まって…。その時のアナウンサーの声の印象はどうでしたか。
●参加者：衝撃で信じられない的な。
●諸橋泰樹氏：「衝撃で信じられない」といった声。性別はどうでしたか？また声は高い？低い？
●参加者：男性のアナウンサーで、声は低かった…。
●諸橋泰樹氏：男性のそういったしゃべり方にどんな印象を持ちますか。
●参加者：危機感があると言う感じ。
●諸橋泰樹氏:なるほど､「危機感がある」という感じですね。何かやばいことが起きているぞ､と。しゃべり方も音楽もトーンがおどろおどろしいですよね。あの陰鬱なロック調の音楽と「今、教育現場が揺れている」という、低い、抑揚のない言い方で、「何だ何だ。とんでもないことが始まっている」という印象を受けますね。しかも新聞の見出しがばーんと出て。
視聴者のおとなたちが、まるきり事前の知識がなくあの出だしのシーンを見せられたら、世の中どうなっているんだと思いますかね。
●参加者：私が１番驚いたのは、やっぱりコンドームのつけ方を、こういうふうにやっているのかっていうのは驚きました。
●諸橋泰樹氏：驚かれたんですね。やっぱりあれ、衝撃的な映像に見えるかもしれませんね。いかがですか、たとえば自分に子どもがいたら、親としてあれを見せられたらどう思いますか？
●参加者：その子どもがって、小学校低学年とか？
●諸橋泰樹氏：はい、小学校低学年のお子さんががいたとしたら。
●参加者：子どもの年齢にもよると思うんですけれども、もし低学年ぐらいだったら、あの番組は見せられないと思ったんですが。
●諸橋泰樹氏：ああ、番組を見せられないと思う。もし親だったら「そうか、我が子もこんな授業を受けているのか」と、ちょっとびっくりするかもしれないですね。それから、親でなければ、「今日びの子どもは、こんなおませな授業を受けているのか。コンドームのつけ方も学んでいるらしいぞ、世の中

変わったもんだ」とか思いそうですね。

多分、事実なんかどうでもいいんですよ。実際にはああいう性教育をやっているのは実験校で、もとより全部の学校でやっているわけではないわけですけれども、それにしても、ああいうふうに報じられると「世の中全部こうか」っていう気がする。しかも、新聞の見出しになり、それから国会が映ってるんですから。

その、国会議事堂や国会の質疑応答が映る意味というのはなんでしょうか。

●参加者：これは社会的に問題であるというイメージをつくるということ。

●諸橋泰樹氏：国まで乗り出したんだぞという、そういう意味ですね。国会議事堂の映像は権威の象徴です。メディアが取り上げ、国が乗り出し、これはゆゆしき問題であると、そういうことですよね。だから、今日びの子どもはおませで、学校ではこんな性教育がやられていて、そのための人形があってコンドームの使い方まで教えていて、けしからんとしか思えないような出だし…というふうに読めます。

どうでしょうかね。ほかに第１パートをご覧になって、普通の視聴者が普通に観ていたらどう思うと思いますか。

●参加者：ごめんなさい、批判的な面しか見ていないから…。

●諸橋泰樹氏：批判的にしか見ていないという優れたリテラシーの人がここにいらっしゃる。それではこのワークショップでの「気づき」の意味が薄れる（笑）。

批判的視点で観るというのは大事ですよね、これが今日の、メディアに描かれたジェンダーを読み解く時の最も大きな眼目です。でも、我われもごく普通の人たちですから、あれ観ただけだったら、そうか、世の中こんなになっているのかって、やっぱり思っちゃう人が少なくはないと思います。

何か気づいたことありますか？

●参加者：男性の声というのが権威的な感じがしました。女性がアナウンスするよりも権威的だったということで。

●諸橋泰樹氏：どうでしょう、女性のアナウンスだったら、人びとはどう思ったと思いますか。

●参加者：これはもう私のジェンダーの偏見が混じっているかもしれないんですけれども、ちょっと柔らかな感じに聞こえると思うので、そこまで問題意識をあおるような重い感じにはならない。

●諸橋泰樹氏：ならないかもしれない。女性の声は一般的には柔らかいと言われていて、あまり迫力がないと思われています。実際にこれから皆さん方がお家に帰ってテレビをつけた時、まじめなドキュメンタリーふうの番組で女性の声だとします。女性の声もありますよ。あるんだけれども、この場合は大抵低い声です。小宮悦子さんみたいな人の声とか、野際陽子さんとかね、あまり甲高い声は出しません。ですが、大抵まじめな番組のボイスオーバーは男性です。男性の声は大体いい声で重々しいです。そういう意味では、やはりことの重要さが男性の声に担われているという感じはあります。

これはいいことでは決してないのですけれども、テレビＣＭなどでも「みなさん、この薬を飲みませんか～」って言っているのは若い女の人の甲高い声で、最後に、「使い方を正しく守りましょう」とか解説とか注意を言うのは男の人の声なんですね、大抵見事に分かれています。ジェンダーが出ちゃうんですよね。

●参加者：それでぼくが思うのは、そういうジェンダーの価値観ももちろんあると思うんですけれども、たとえばぼくは合唱をやっているんですけれども、女の人の声って、こう上に引っぱるような感じで上に出すというか、何か、ただ煽情的というかがんがん行く感じだけど、男の人のって、もっとこう、ふくよかなというか、そういう声が別にジェンダーとかいう感覚なしにあるんですよ。そういうことを考

えると、男性の声でこれはゆゆしき問題なんだぞっていうのをアピールしているという部分、ジェンダーの問題もあるとは思うんですけれども、男性の声を使う背景には、ただ煽情的なのじゃなくて、低い声が安心させるという生理的な一面もあるんじゃないかと思う。

●諸橋泰樹氏:おっしゃるとおりでしょうね。よきにつけあしきにつけ、男性の声は低めで包容力があって重要性が醸しだされるような雰囲気があるのは確かでしょう。だからこそ、またつくり手はそれを利用する。

第１パートのドキュメンタリーふうのところでは、男性のアナウンスの声、もう１つが音楽、性教育人形やコンドーム装着のシーン、それから学校、新聞、国会議事堂などのコラージュ、そして国会風景で首相まで話題にするという、さまざまなマルチモーダルな素材が特徴ですね。事実はどうであれ、今や子どもたちの教育はこんなになっているんだぞという仕掛けです。恐らくここで多くの人たちは、これはゆゆしき問題が起きているぞというふうに思うのではないかと思われます。

じゃあ、第２パートはどうでしょうか。

宗教的雰囲気が漂うスタジオ

●諸橋泰樹氏：第２パートは、会場に移ってということですけれども、ではこの部分で何か気になったことを伺いましょう。どうですか。

●参加者：中尾彬さんの立場がちょっとおもしろいと。

●諸橋泰樹氏：どういうふうにですか？

●参加者：何かこう、細木さんほどではないけれども、何か権威的な立場にいて、ほかの観客席にいる人とはちょっとまた違った立場なんだけれども、細木さんともまた違う雰囲気を出しているというか、違う立ち位置にいるなと。

●諸橋泰樹氏：なるほどね、あの中尾さんの位置が独特で、っていうことですね。もともと細木さんに対する噛ませ犬で用意した人物なんでしょうけれども、彼自体があの第２パートでは権威的っていうかね、ふんぞり返って腕を組んでみんなの意見をばっさばっさやっていくみたいな、そういう立場ではありましたね。彼を配置したところも、番組としては細木さんと多少やりあえる重要なキャスティングだったんだろうと思いますね。

ほかに何か印象に残っている映像とかありますか、

●参加者：画面の上端に細木数子さんの顔がちょこちょこと出てて、何かあるたびに細木さんの様子をうかがっている感じはとてもしました。

●諸橋泰樹氏：そうですね。細木数子さんの表情を必ずちらっと映します。最初の第１パートでも映っていましたね。どんな表情でしたか。

●参加者：何て言うんでしょうね…、苦虫をかみつぶしたような、ちょっと何か言いたげなっていうか…、最終決定権はあの人が握っているというのは、そこからわかりそうな感じ。

●諸橋泰樹氏：視聴者があらかじめわかっちゃう。視聴者は細木数子さんの要所要所で映っている顔を見ながら、「ん、怒ってるぞ、怒っているぞ、あとで爆発するかな？」みたいに、ああいうところをまた我われも楽しみながら観ている。性教育への賛成意見が出る場面では憤懣やる方ないっていう顔をうまく映していましたよね。それから、「まだ早いと思います、だから変態が生まれるんです」という発言があった時には彼女は、「うんうん」とうなずいていましたね。我が意を得たりみたいな感じでした。

巧くカメラもすかさず捉えてます。このような彼女の映像が画面の端っこに映っているところがミソでしょうね。我われは会場と細木の表情を交互に見比べられる空間を共有しているというところがあった。
　どうでしょう、ほかに何か印象に残っているものは。
●参加者：顔のアップのサイズが細木さんのほうがクローズアップに近くって、それだけで印象、インパクトを強くしているというのと、テロップの出し方がコメントに合わせる特殊法を使っていて、わざと合わせているみたいなところ。
●諸橋泰樹氏：それは第３パートにも言えることですね。彼女の迫力ある大きな顔が、あの大画面でのアップで来ると、のけぞるような感じがあります。第２パートでほかに印象に残ったものはありますか。
●参加者：女性の芸能人のほかに会場の女性の方が２人、性教育にイエスの方とノーの方というのがお話しされていたんですけれども、ノーの方が自分の弟がどうのこうのと言って経験談を話しているのに対して、イエスの方は友だちから聞いたんですけれどもという伝聞体というか、やんわりしたような話をされていたので、説得力にとても差が出ていたなというふうに思いました。
●諸橋泰樹氏：なるほどね。自分の弟の話は説得力があるけれども、人に聞いた話ですけれどもって言うのは説得力を欠くと。
●参加者：いつも思うんですけれども、日本の社会って２つに１つなんですね。二者択一なんですよ。小学校低学年か高学年かという性教育の問題も。また性教育の教材とかも恐らく海外の真似というか海外を参考にしてて、だけど日本社会の中には日本社会の人間のあり方があるわけですよ。なぜ１人ひとりの個性というのか、そういうものをきちっと考えた上で子どもの性教育を考えないのか。
●諸橋泰樹氏：なるほど。
●参加者：一応ね、多様性があっていいんで、それを集約して、その上での子どもの性教育っていうことが大事じゃないでしょうか。だから急にあんなお人形を持って来られたって、私なんかハッとしてびっくりしました。きょう初めて観たからね、何やってんのって感じですね。
●諸橋泰樹氏：あの性教育人形の映像にはやはりインパクトがあったんですね。多くの人は、学校で何やってるのか、と思わせる効果があったということでしょう。どうもありがとうございます。
●参加者：観ていたら、会場の女性 100 人の方が白い服に赤い花をつけていて、みんなが一緒っていうのが多分ポイントなんだろうなって思うんですけれども。あと、細木さんもタッキーも白い服で、何か、細木さんを教祖にしてちょっと宗教的な感じもあるかなって私は思いました。
●諸橋泰樹氏:そうですね。あのスタジオ空間自体が一種の祝祭空間というか宗教的な雰囲気でしたね。白は処女性の意味もあるかもしれませんし、白無垢のように、教祖様に「すべてを信じる。あなた色に染まります」と言っているような。
●参加者：私も女性 100 人の服装についてなんですけれども。彼女たちが身体のラインが見えるシャツに、それから私が眼鏡をかけているというのもあるんですけれども、眼鏡をかけている女性が１人もいなくて、そして全員が髪を染めていて、メイクもきっちりとしていて。何て言うか、私の偏見かもしれないですけれども、男性が望む女性の姿、美しさを表現しているのではないかというところが１番気になりました。それともう１つ、ゲストで来ていた女性が全員タレントで、１人もジェンダーとか性教育の専門家がいないという点で、細木数子に何か専門的な知識で対抗できないような人たちを並べていたというのもすごく気になりました。
　●諸橋泰樹氏：胸が強調されるような絞りが入ったブラウスで、みんなフェミニンでしたね。眼鏡の女性がいなかったということまでは気がつきませんでした。なるほどね。

そういう空間をわざわざつくったんでしょうね。恐らく100人の白装束の女性たちは、よくわかりませんけれども、業界用語で言うところの仕出屋さんというか、プールされていて、どわーっと動員されている人たちかもしれません。あの服はもちろん支給されて、みんな同じ格好をさせられて同じような髪形で、そういう意味でまさに個性を剝奪されてあなた色に染まりますよという、表象だと思います。

会場の２人から賛否両論が出ましたけれども、恐らくもうちょっと多くの人に訊いているんだと思いますね。録画時には４～５人に聞いているんじゃないかと思いますけれども、編集後の番組では性教育賛成派、反対派を１人ずつ映した。でもその時に、さっき指摘してくださったように「性教育を早期からやってもしょうがないよ」っていうのが説得力ある自分の弟の話で、「いや、早期からやったほうがいいんだ」というのが人づての話で説得力を欠くという、一応１対１のイーブンだけれども、中身的な差がある。それから多分ほかにも会場の女性を指名して意見が出たんでしょうけれども、カットしてあの２人だけ放送で残したというところもあるでしょうね。さっきのレクチャーのところでも話しましたが、映らなかった部分が気になる。私たちは、最終的に映っていたところだけで判断し現実をつくってゆくしかないわけです。

ほかに第２パートで気になったところ、ありますか。

●参加者：性犯罪と性教育を結びつけています。性教育を早くからしていることで、本当に性犯罪は増えているのでしょうか。

●諸橋泰樹氏：無理がありますね。

●参加者：はい。

●諸橋泰樹氏：先ほどの方からは、低学年か高学年かで無理やり切りたがるという、その２分法もいかがなものかとの意見がありましたね。

●参加者：あの会場の100人のアンケート、「やらせ」じゃないんですか？

●諸橋泰樹氏：68人が賛成で32人が反対でしたっけ。

●参加者：大体２対１でしょう。

●諸橋泰樹氏：どういう意味でやらせだと思われますか。

●参加者:あそこの場では、賛成派を増やしてウエイトをかけておいて、で、教祖様でひっくり返すと。

●諸橋泰樹氏：だとしたらなかなかの演出ですね。そこまで考えていたかもしれない。あり得ることですね。つまり、さっきレクチャーの時に図に書いたように、編集の過程とか番組のつくられ方って、全くブラックボックスです。もしかしたら１人ひとりの参加者に「あなた、賛成派に入れてよ」って事前に耳打ちして仕込んでいたかもしれませんね。これは本当にわからない。だからぼくらもできあがったところだけを観て、おや意外に賛成派が多いじゃない、と思います。でも最終的には、あれは反対派にひっくり返されて、細木教に折伏されてしまうわけです。

“ご託宣”を支える様ざまな演出

●諸橋泰樹氏：それでは、細木主演の第３パートで特徴的なのは何かありますか。

●参加者：もうこれは特徴だらけなんですけれども、とにかくテロップは大きい赤字。画面の３分の１まで行く。あとＢＧＭはドラマチックでまるで何かこう、お涙頂戴ドラマのラストシーンで、そこにかぶせられる音楽と同じような。それからあともう１つ。断言口調。大声で恫喝的です。

●諸橋泰樹氏：テロップが細木数子さんの発言をなぞりながら、赤文字で強調していましたね。また、

背後に流れる音楽がしんみりとして、あぁいいこと言うなあ、という感じになってくる。他方で細木さんのしゃべり方が非常に権力的というか、恫喝的ということですね。
●参加者：性教育は、子どもがもう少し成長するまで「待つべきです」とか、大きな声で言い、大きな字であらわす、そういう決めつけたような。
●諸橋泰樹氏：断定調ですね。ほかにパート３の映像で気になったことはありますか。
●参加者：２部・３部のところで、会場には女性だけを…、100 人の人ってみんな女性だけですよね。何で女だけなのかなって思った。
●諸橋泰樹氏：なるほどね。そもそも、集めたのはなぜ女性だけなんだろう。
●参加者：性教育って、変な言い方かもしれませんが、ある面で男の子のためにやっているというのもあると思うんですよ。それなのに何で、あの会場には女しかいないんだろうってすごく思ったんです。
●諸橋泰樹氏：ふんふん。細木さんは「小学校６年生でどれだけの子が妊娠して堕ろしてますかッ」って怒ってましたが、小学生に妊娠させる側の男の問題こそいいのかよって、そこ突っ込みたくなりますよね。
●参加者：第２パートの最後のところで幼稚園生が生理になったっていうので、集団ヒステリーみたいな感じでみんなでキャーってなりましたよね。それを諫めるような感じで細木数子さんが登場して、そこからまず１番最初に言ったのは、「まずシンプルに考えましょう」って。そこから広げる話は全然シンプルじゃなくて、人間としての原点はこうだああだみたいな、それは果たしてシンプルなのかなという、どんどん精神論に向かっていく。教育の話じゃないという、そこがぼくにはとっても印象的でした。
●諸橋泰樹氏:スピリチュアルの方にもって行っちゃった。まあ、言うべき中身がないんでしょうね。「子育てに愛を」とか、ほとんど一般道徳の話でスカでしたね。でも、あれ、あの音楽かかっていると、ついつい、という感じがありますよね。
　何か他に、会場の人たちの様子はどうでしたか。
●参加者：中尾彬さんがどんどんどんどん細木数子のほうにすり寄っていって、こっちは椅子の色が赤でしたよね。細木さんの座っているのは白い色で、しかも高い背もたれの大きな、何か神様の椅子みたい…。
●諸橋泰樹氏：初めは威勢のよかった中尾は、神々しい椅子に座る神様にすり寄っちゃった (笑)。
●参加者：はいはい。今まではほかの人の発言に対して結構居丈高に、北欧の事実を言ったりなんかしていたのが、だんだん何だか…。
●諸橋泰樹氏：形勢、何か弱くなっちゃったね。最後はうなずいていましたね。
●参加者：「おっしゃっていることは正しいですよ、あなたのおっしゃるとおりですよ」っていうふうに見えました。
●諸橋泰樹氏：音楽の効果もあって、何だかしんみりしちゃいましたからね。
●参加者：パート１、パート２と細木さんがしゃべらなくって、最後に耐えに耐えてきた細木さんがたくさんしゃべって、それで反論が出てこなくてお終いっていう構図になっているなって思いました。
●諸橋泰樹氏：全体の構成がそうですね。最後にひっくり返すようになって、それ以降だれも口の挟みようがないという感じの終わり方でしたよね。
●参加者:白装束の女性たちが細木さんの言うことにいちいちうなずいているシーンを映すんだなって。だれも不満みたいな「こいつ何言ってんの？」みたいな顔の人はそもそもいないし、いても映さない。で、もう満場一致でみんな説得されて細木さんの演説に何か心洗われているみたいな感じがすごい出されて

いるなとは思いました。
●諸橋泰樹氏：あのうなずいているシーンを観て、視聴者はどう思うだろう。
●参加者：何かやっぱり乗せられちゃうというんですかね。
●諸橋泰樹氏：そうでしょうね、多分。うなずきって何となく伝播性があるから、人がうなずいているシーンを観て我われも思わず、テレビの前で一緒に「うんうん」って、多分うなずいちゃうと思いますよ。しかもあのバックグラウンドの音楽ですからね。
●参加者：細木数子さんのしゃべり方なんですけれども、最初は確かに恫喝的で厳しい怖い言い方をするんですけれども、最後らへんからだんだん笑顔で優しく諭すようなしゃべり方になっていったと思う。
●諸橋泰樹氏：ははぁ。これ、効果的ですね。最初にガツーンとやってびびらせておいて、だんだんだんだん優しくなって懐柔していっていますね。そこにすかさずＢＧＭが入ってしんみりさせている。計算されてかされずか、いずれにせよ説得術がはからずも応用されていますね。ただ、ＢＧＭはもしかしたら会場では流れておらず、編集作業で入れたのかもしれませんが。とすると、会場のうなずきは音楽の効果ではなく、細木式説得効果か、あるいは先程のご発言にあったみたいにうなずいている人だけ撮って再生したか。
●参加者：これ見てて１つ「やらせ」番組みたいに見えるんですよ。それで最後は結局、細木数子さんの白い服ということはシャーマン性ですね、彼女が神聖な巫女さんだということをあの番組を使って強調したんだと思います。だから今、逆に細木数子がどうしてメディアから消えちゃったのか、私はそれがとっても不思議なんですけれども (笑)。
●諸橋泰樹氏：この番組は、第１パートで問題提起をして、現在こんなひどいことになっているという構成がなされていました。第２パートは、小学校低学年からの性教育の是非をめぐっての討論でしたが、発言者おのおののスタンスが出され、細木数子さんがその発言者に対して憤懣やるかたない、といった顔が映ったりする構成のされ方でした。ここでは先ほどやらせじゃないかという指摘があったくらい「性教育は早くしていい」という答えが多かったわけだけれども、第３パートで細木数子がガツンと言って、一種の祝祭空間と言いましょうか宗教的空間の中で、巫女さんが白と言えば白なんだという形で終わる。
　しかも巫女さんの言っている中身は、小学校低学年からの性教育に関しては、年端もいかない子が興味をもってしまい妊娠につながっているから駄目だと断定して、だから性教育はいらないというえらく短絡的な主張でした。さっき言ったように妊娠させる側の方こそ問題なんですがね。しかもそれは例外中の例外で、多分それは低学年で性教育をしたからではない。一方では、性教育は必要だけれども愛を持ったおとなの子育てが大事だといったような一般論に話がすり替えられて、癒し系の音楽と白装束の女性たちのうなずきシーンとともに何となく納得してしまった（笑）。
　この番組自体はもちろん他愛のないショーだと思います。けれども、恐らくこれを観たオーディエンスの少なからぬ人たちには、「やっぱりね。トンデモないことが起きている」という意味が構築されてしまうかもしれません。多くの人たちは性教育は大事だと思っているけれども、細木数子がひとたび「親としての愛が大事だー」とか言うと、「うん、そうだそうだ」という思いが構築されるようなつくられ方が、番組が成功しているかどうかは別として、そういう構成のされ方になっていたということは皆さん方のご指摘のとおりです。

メディアを読み解くメディアリテラシーの力

さて、いかがでしたでしょう。きょう皆さん方に知っていただきたかったのは、つまり、何気ないこんな他愛のないお笑いのような番組の中にも、ちゃんと、ある種の政治的なメッセージが込められていて、しかも、その中で巧妙に、音楽を使ったり映像をはめ込んだりテロップをかぶせたり、細木さんの表情を見せたり、うなずきを見せたり、色いろなテクニックを交互に駆使しているということです。さすがプロですね。そうやって、オーディエンスをある種の意味経験の世界に導こうとしている。私たちは、このように構築されたメディアを観て、今度は「うーん。最近の子どもはけしからん」という現実をまた構築してしまっているということなんです。

しかし我われは、言うまでもなく、メディアがいうことに右から左に左右されているわけではもちろんありません。一方では「こんなことあるわけないでしょう」とか批判的に見られる人ももちろんいるわけです。私たちが鍛えるべきは、このようなメディアの構築のされ方や効果に常に自覚的でありながら、メディアをちょっと批判的に見たり遠ざけたり、あるいはうまく使ったりお笑いにしてしまったりという、メディアを主体的に使う能力なのではないでしょうか。

こういった能力を総称して、メディアリテラシーというふうに言います。メディアの読み解き能力ですね。それはもちろん、メディアの批判的な読み解き能力も含みますし、私たちがメディアと現実のはざまの中でいかに生きていくか、あるいはメディエイテッドな世界をいかに生きていくかという、そういう実践でもあるかと思います。

ジェンダーをめぐるステレオタイプな言説や本質主義的な言説は、周囲にあふれています。また在日する外国人をめぐる排他的な言説も少なくありません。マイノリティーに対する差別的言説は、ネットをはじめとする本音の空間において数多く流通しています。たとえば『ザ･コーブ』の上映阻止とか『靖国ＹＡＳＵＫＵＮＩ』の上映阻止とか、ＤＶ講演の阻止とか、閉塞状況の中で歪んだナショナリズムや差別観がそのはけ口を求めるかのように、表現が表現を弾圧しているのです。

私たちは、そういう言説と言説との政治的な闘争の中で、いかに自分たちの声を出していくか、そしてまたいかに人の声も聞いていくか、同時にこういうメディアの権力のような声をいかにすり抜けたり批判したりしていくか、大事な力が求められているんだろうと思います。

今日はジェンダーの話から始まって、だんだんメディアリテラシーの話にもなりました。ぜひこれからは、メディアに接する時、声はどうなっているのか、音はどうなっているのか、何が映っているのか、人びとにどういう経験をさせようとしているのか､これにはどういう意味が構築されるのかなどを考え、その意味をめぐる闘争に眼を向けてみてください。メディアは意味のないことは絶対しません。電波を１秒流すたびに膨大なお金がかかっていますし、紙面１行に莫大なお金がかかるわけですから、大変な手間とお金と意図をつぎ込んでいます。そういう中で私たちは、意味を読み解いて、ある種の闘いをすることが求められているのだろうと思います。

ジェンダーという社会的・政治的に構築された意味をめぐる闘争で、これから皆さん方と共同戦線が張れればいいなと思っています。また、構築されたメディアとメディアによる現実の構築という視点から、まさに今回の細木的性教育バッシングの言説がつくられ、人びとの性教育バッシングの意味空間がつくられたところを皆さん方に分析していただき、そういう見方を多少なりとも身につけていただけたのでしたら、何よりと思います。

さて、時間が来ましたので、とりあえずレクチャーとワークはこれでおしまいにしたいと思います。

どうもありがとうございました。

自覚し、発言していくことが重要

●司会・新田啓子：諸橋先生、どうもありがとうございました。あと５分弱時間がありますので、話し足りなかったこととか、今、また新たに浮かんだコメントなどを、時間いっぱいまで受けたいですね。先生へのご質問もあるかと思いますので、伺いたいと思いますが、どなたか。
●質問者：今日はジェンダーバイアスとメディアバイアスみたいなお話だったかと思うんですが、諸橋先生のモラルコミットメントというか、理想とされるところがどこにあるのかなというのが、ちょっとあいまいというか、わかりづらかった面もまたありました。

たとえば、ジェンダーの差異というものがなくなる状況というのを理想とされていらっしゃるのか。あとメディアに関して言うと、図にお書きになったメディアの構築のされ方というのが、ベターなものになることはあっても、多分パーフェクトなものになることはないと思うんですよね。で、あとそういうメディアの図式というのをあちこちで見たり聞いたりするわけですけれども、一方で、たとえば現代のニュースメディアが偏向していると言っている市民運動の人たちが、非常にオウム真理教まがいの、アメリカ謀略説的な言説を意外にナイーブに信じ込んでしまっていたりというのもあります。今日の映像の使い方にしても、小泉が出てくる細木数子の番組を、世の中にあまたあるメディア資料の中でそれをわざわざ選んで使うということは、また別種のポリティカルな意図というふうにとれなくもないわけですね。その辺をちょっとお伺いしたいと思います。
●諸橋泰樹氏：難しいご指摘をいただきました。ぼくの立ち位置はですね、ジェンダーがなくなるとかなくならないということではなく、カテゴライズしていく暴力をなるべく最小限にとどめたいというぐらいのことです。ジェンダーは、なくなるならなくなったって何の問題もないと思っています。ジェンダー、エスニシティ、レイス、ネイション、あらゆる区分は消滅していいと思ってはいます。けれども、認識対象を分節化することがほとんど業（ごう）のようになってしまっている我われ人間にとって、差異の政治学はそうそう簡単になくなるものでもない。我われは、どの時代どの文化にあっても否応なくジェンダー言説の中で、その存在を拘束され、身体も精神もやむなくジェンダー化されざるを得ないでしょう。それを脱構築している実践家もたくさんいらっしゃいますが。多くの人たちは、それをいきなり脱ぎ捨てるわけにもなかなかいかないということで、そんなに簡単に世の中から命名による差異の発見という言語実践やそれがもたらす女男差別がなくなるとは思っていません。

ただ、最低限、そういうジェンダー区別のようなもので人を差別するのはいかがなものか、それはやはり減らせられれば減らしていったほうがいいし、それはもう皆無になればなったほうがいい。それでもし、性別が邪魔になるのなら、そんなもんはなくなっても結構とは思ってます。

「虹は７色でも２色でもいいじゃないか、どうせカテゴライズしきれないんだし」って言っておくのは大事だと思うんですね。対象を認識するための言語化作業の大事さを認めつつ、それを固定化して安心してしまいたい誘惑をなるべく相対化しながらやっていくしかないだろうという、まあそんなぐらいの立ち位置です。

それから、メディアに関してはこれもおっしゃるとおりで、ベターだけれども、パーフェクトなものはあり得ないでしょうね。それも今のお答えと同じで、やはりジェンダーに対してまったき自由な存在様式はかなり難しいだろうというのと同じように、メディアが行っている作業も、対象を言語や映像な

どでとらえて固定化しようという人間の認識行為と同じものです。ですから、誰かが、ある視点から、ある意図を持って、時間に追われてとか、視聴率や販売収入のためとか様ざまな諸関係の中で、言語や映像や音に置き換えて表現しようとした、限界のあるものということで、パーフェクトはあり得ない。しかし、私たち視聴者・読者が、このメディアが構築した生活世界を生きていくしかないのだったら、メディアもまたその存在を社会的に構築されているということ、そのことを知っているのと知っていないのとでは随分違うはずだと思うんですね。

ついついぼーっと見ていると右から左に流されてしまいますけれども、「これって映像のつなぎ方が不自然だよね」とか、さっきのように、「もしかして２対１というのはヤラセじゃないの」とかというふうに見ていくのはすごく大事だと思います。作り手の人たちは、自分たちがつくる番組や記事はどうせパーフェクトではあり得ないと多分先刻承知している。しかし我われオーディエンスの側が、そこのところをあまりよく理解していないで見たり聞いたりしている節もあるので、まず自分が、これがパーフェクトなものでないぞということを知悉していることが第１歩じゃないかということなんですね。私たちもメディアの限界をよく知っていて使わないと、やっぱりいけないんじゃないかというぐらいの意味です。

当然、対抗言論や市民運動の主張も、ある種のイデオロギー性を帯びざるを得ません。今回、ぼくが素材に使った番組も、おっしゃるとおりポリティカルな意図があるわけです。我われは作用に対する反作用のようなこういったせめぎ合いをしながら、ボチボチとやっていくしかないんじゃないかと思っています。

全部お答えになっているかどうかわかりませんけれども、ありがとうございます。

もうお一方ぐらいいかがでしょうか。

作り手のメディアリテラシーの重要性

●質問者：ありがとうございました。日本スポーツとジェンダー学会で幹事をやっています。メディアリテラシーということについてお聞きしたいんですけれども。今回は主に受け手としてのリテラシーのワークショップだったんですが、作り手としての能力というものを教育の現場でどのように扱っていくか、諸橋先生のお考えを伺いたいと思います。

●諸橋泰樹氏：ありがとうございます。

先ほど作り手は、メディアに限界があることは百も承知だと言いましたけれども、実はこれらは作り手の人たちが体系的に勉強して身につけているものでは多分ありません。ＯＪＴの中で、「こういうものっていうのはこう構成するもんだ」とか「ここにはこういう映像をインサートするものだ」とか、「記事はこう書け」「見出し配置はこういうふうにしろ」などと先輩から言われ、ほとんど無意識的、経験則的につくってきた番組であり、記事であるだろうと思います。そういう意味で、まさにおっしゃられるように、作り手の自覚はすごく大事だろうと思います。自分たちのやっていることは主観である、表現方法には限界がある、それこそパーフェクトではない、時間の都合で切り取ってここしかのせられないのに、やむなくなのに、あるいは行き当たりばったりなのに、自分たちが構成した商品に人びとは感心して接している、それによって現実を構成しているということを、自覚的になってもらわないといけないと思います。作り手は無自覚的につくっていますけれど、しかし改めて見ると、たとえば細木数子が怒っている顔を他の人の発言のシーンに挿入したり、細木数子が言っているところでうなずいている

シーンを交互に入れたりというのは、大変なテクニックですよね。

残念ながら、メディアの現場の中では、そういうリテラシー教育というのはほとんどされていないようです。やはり「馬鹿野郎、何やってんだ」とか「こんな映像じゃ話にならない。もっとインパクトあるものとってこい！」と言われたり、書いてきた記事をデスクが読みもせずにくずかごに捨てられたり、といった中で鍛えられて、つくっていき、身につけていくようです。ですので、体系的な社員教育によって「たった１コマからでも人びとはそこに意味を読み取っているんだぞ」「自分たちが何気なく構築した商品から人びとは現実を構築しているんだぞ」といったその怖さを、メディアの作り手側にもうちょっと自覚してもらう必要があるのではないでしょうか。

これからメディアの作り手のリテラシーというのは、すごく大事な課題になっていくだろうと思います。もしかしたら視聴者・読者のほうが賢明になっていますからね。作り手も安閑としていられないのではないでしょうか。よろしいでしょうか。ありがとうございます。

●司会・新田啓子：それでは、質問も尽きないとは存じますが、時間となりました。初めての双方向的な試みだったんですけれども、とてもたくさんのご意見をいただき、有意義なやりとりができたことを感謝いたします。

最後、メディアリテラシーという課題で締められましたが、ここにいらっしゃるのは、もともとメディアリテラシーを鍛えてきた方々が多いのではないでしょうか。細木数子に対して批判的ですと意見の中で前置きした上で、制作者の意図や、つくられてしまったものの内実を、確認するような発言が印象的でした。「構築されたメディアとメディアによる構築」という主題でしたが、一箇の番組が制作される上で、センセーショナルに問題化、主題化された性というのが、どれだけのインパクトを負わされるものかがわかりました。今日はマスコミ論の専門的な話でしたが、センセーショナルに、ある角度をもって作られた性の言説が、非常に便利な主題として、メディアにエネルギーを供給している状況を、どういうふうに解体できるか。そんなことも考えさせられました。

きょうはお足元の悪い中、おいでいただきどうもありがとうございました。諸橋先生、どうもありがとうございました。

●諸橋泰樹氏：こちらこそどうもありがとうございました。お疲れさまでした。

参考文献（ワークで使用した番組の内容が詳しく出ています）
諸橋泰樹『メディアリテラシーとジェンダー』現代書館、2009 年。